

自分らしく素直な気持ちで
自由に筆を走らせてみよう！
絵手紙で広がる新しい世界

Interview



日本絵手紙協会公認講師

脇坂正義さん

人に伝えたい気持ちを文字や絵で表現する「絵手紙」は、身近に楽しめる趣味として広く愛されています。今秋開講する第40期KEIBUN文化講座(草津会場)の新講座「おもしろ絵手紙教室」で講師を務める日本絵手紙協会公認講師の脇坂正義さんに、絵手紙の魅力やその楽しさをお聞きました。



脇坂さんは、旅先でも心が感じるまま、スケッチをするように絵手紙をかく。



「絵手紙」とは文字通り「絵のある手紙」のことだが、もともと「絵手紙文学」として誕生したのだと脇坂正義さんは話す。

「昭和50年代なかばに書家の小池邦夫先生が提唱した芸術のジャンルのひとつで、少し特徴的な作法で行っていきます」
そのひとつが「ヘタがいい、ヘタがいい」という考え方。いったいどういう意味なのだろう？

「絵手紙は気持ちや素直な心を伝えるためのもの。うまくかこうとか、褒めてもらうとか、人の評価を求めると、相手の心には届きません。大切なのは、無為で尊むいにして(とうとし)——心でかくことなのです」

自分の気持ちを素直に表現し、感じたままに伝えることが絵手紙の真骨頂なのだという。しかし、ビギナーとしては不安が残る。「絵手紙の作法は、うまいへたにとらわれず、自由にかくためのものです」と脇坂さんはにっこり。「筆の持ち方も従来とはまったく異なり、筆の持つ方を軽く持ち、肘を上げリラックスした状態でかいていきます。かき順も右から左、下から上でも構わない。さらに下がりもありませんし、手本もありません。必要なのは先入観を捨てること！このようにお伝えすると、たいいの生徒さんは驚かれますが(笑)」

うまくかかよつに習ってきた作法とは逆に「ヘタにかいていい」と言われると、戸惑うの

も当然のこと。しかしこの意外なルールこそ、絵手紙に新たな意味を与えたといい。

「かく人が自分の目で見て、自分の心が感じたまま伝える、それが絵手紙です。そこに失敗はありません。失敗がないから恐れる必要もない。自分の好きなものを、日記のように気楽にかいていく。出来上がったら誰かに送ってみる。それだけでいいんです。そう思えば楽しいでしょう？」

発想の転換とはなかなか難しい作業だが、気づいた頃には絵手紙の魅力に魅せられていること間違いなし。脇坂さん自身も昭和30年代から年賀状教室の講師として教えている中で、小池氏と出会い、絵手紙の楽しさ、面白さにすっかりはまってしまったという。

パソコンなどの普及で一時は字をかくことへの関心が減ったこともあったが、昨今の書道ブームなどもあり、再び注目が集まっている。脇坂さんも今この時代だからこそ、絵手紙がクローズアップされることに意味があると考えている。

「筆、墨、そして顔彩がんさいといった日本の伝統的な道具を用いて和紙にかいていく。この作業こそ日本人の原点ともいえるものではないでしょうか。絵手紙を通して、日本文化や日本の歴史への関心を深めていただければと思います。講座では季節感あふれる題材を取り上げていく予定です。お楽しみに！」



友人から脇坂さんに送られた巻紙の絵手紙。

脇坂正義(わきさかまさよし)

明石市在住。幼少から手紙や年賀状をかくことに親しむ。昭和30年代より年賀状教室の講師を務める中で、絵手紙と出会い、日本絵手紙協会公認講師の資格を取得。現在も明石市を拠点に、大阪、神戸など数々の教室で講師として活躍。絵手紙の普及につとめる。

※日本絵手紙協会は小池邦夫氏によって昭和60年に創立。平成17年山梨県忍野村に「小池邦夫絵手紙美術館」が開館されている。

40-18 おもしろ絵手紙教室 **新講座**

講師/日本絵手紙協会公認講師 脇坂正義
会場/しがぎん草津ビル

講座内容 各14:00~16:00

- 10月 2日(月) 絵手紙とは…/基本の実技/植物を描く
- 10月16日(月) 文字の練習と言葉について/果物、花にチャレンジ
- 10月30日(月) 静物を描く/ペン、鉛筆などで描く
- 11月 6日(月) 年賀状の準備(1)~ゴム印をつくる
- 11月20日(月) 年賀状の準備(2)~干支を描く
- 12月 4日(月) お正月に向かって縁起物を描く/書き初め

※材料費・用具代が必要です。第1回の講座で説明します。